告　辞

本日ここに、平成二十四年度（二〇十二年度）卒業証書・学位記授与式を執り行うことができますことは、喜ばしい限りであります。卒業生・大学院修了生の皆さんに心から「おめでとう御座います」と申し上げます。

本日の晴れの卒業式を迎えられた卒業生の皆様！！　この卒業式を迎えられましたことは、これまでの皆さんのたゆまない努力と精進の成果でありますが、同時に多くの方々、例えば、ゼミの先生や先輩、サークルの同僚、などなど・・多くの方々の応援・ご支援の賜物であり、それらの関係者各位と共に祝意を表させていただきます。卒業生諸君におかれましては、ぜひ、これまでの保護者の皆様の暖かい慈しみへの御

礼と共に、これらの方々からのご支援などにも心からの感謝の気持ちを表していただきたいと思います。

ところで。東北学院大学の前身である東北学院は、今から百二十七年前に、個々の人間の持つ能力を伸ばす人格尊重と個々人の人格の確立をめざす高等教育機関として設立されました。今でいえば、リベラル・アーツ・カレッジのスタートをきったわけであります。創立後、まもなく仙台市青葉区東二番丁通りに本格的な学校を設置し、東北学院の教育体制が固まったわけです。第二次大戦末期の仙台大空襲において仙台市の中心部がほぼ丸焼けになった時に、この東北学院の建物は、内部が全焼しながらも骨格の赤レンガの建物は残存いたしました。その建物の正面入り口には皆様がご存知の「LIFE, LIGHT, LOVE」という東北学院におけるシ

ンボル的な言葉が記されていました。これは、第二代院長のD.B.シュネーダー先生が生徒・学生に語りかけた言葉として伝えられています。この言葉に関連したことで、皆さんが在学中に礼拝で学んだ聖書の言葉の中で代表的なものは、聖書のマタイによる福音書に記されている「地の塩、世の光」という聖句ではないでしょうか？卒業後の今後の人生で、是非、「地の塩、世の光」としての働きを発揮するよう期待しております。その思いを込めて、本日授与した卒業証書・学位記の見開きにこの聖句を記載させていただきました。

ご承知のように、東北学院では、創立のときから百二十七年後の現在に至るまで、毎日の学校礼拝を大切にしており、「若者の心を育てること」を最も重要視してまいりました。まさに、この時代において、東北学院の建学の精神がゆるぎないものとして社会でその意味を発揮する

ものと信じております。

東北学院大学では、毎年、一冊の「大学礼拝説教集」を刊行してきております。本年度（二〇十二年度）に第十七号となります。ここには、宗教部長や宗教主任、牧師の先生方など、礼拝で説教を担当した人の説教・奨励の内容をおよそ十五から二十件程度収録しており、礼拝堂のロビーに、自由に取れるように置いてあります。在学中に読めなかった方は、卒業後にでも目を通していただきたいと思います。

ところで、一昨年三月十一日に我々は東日本大震災を経験しました。この極めて厳しい稀有の経験から多くのことを学んだことと思います。このときに多くの人々は多大の疑問を持ったことでしょう。特に、キリスト教に関連したこととしては、「なぜ神様がいるのにこのような悲惨なことが起こるのか？」という疑問ではないでしょうか？このことに対して明確で心にしみる

メッセージを伝えてくれた方がいました。

日本キリスト教団出版局で刊行している月刊雑誌「信徒の友」２０１１年１０月号（３０－３３頁）に岩手カトリック大船渡教会信徒で医師の山浦玄嗣（はるつぐ）氏の講演報告が掲載されておりますのでそれを参考にして考えていきたいと思います。そこで山浦氏は次のように述べておられます。『大震災から少し落ち着くと、私のところにテレビ、新聞、雑誌のインタビューが殺到しました。私が医者だからではなく、ケセン語訳聖書の著者だからです。彼らは皆、判で押したように、「東北の人は非常に我慢強く、正直で善良である。こういう人たちがなぜ、このような目に遭わなくてはならないのか。神さまはなぜこのような酷い目に遭わせるのか。信仰者として今回の出来事をどう考えるか」という質問を投げかけてきました。私は髪の毛が逆立つくらい腹が立ちました。私はそんなことを

一度も考えたことがありません。あの惨害の最中に何千人という気仙の人間を診ました。連れ合い、親、子どもを亡くした人たちの話を聞いて一緒に泣いてきました。でも、『なして、おらどアこんたな目に遭わねアばならねアんだべ』という恨み言を聞いたことはただの一度もありません。』との記述があります。また、その後に、「・・・人は皆死ぬようにできています。・・・人生は災害の連続です。・・・人が死ぬのは本当に悲しいです。そして、それとは別に災害が起こるのも当たり前のことです。この世界はそのようにできています。「なぜ」と問うこと自体意味がありません。」「生物はとても保守的にできていて、自分と同じような子孫を残すように遺伝子が働きます。ところが、ときどき出来損ないができます。これを突然変異といいます。環境の激変で親世代が死んでしまっても、新しい環境にはこのほうがかえって有利であることが

あり、これが生き延びます。・・・そうやって災害のたびに生物は進化するのです。だから、人間はあらゆる生物の出来損ないの集大成とも言えるのです。このおかげで私たちは神さまを知るにいたったわけです。」と続けておられます。

大変重要なお話と思います。聖書には、いくつかのなかなか理解できないような記述があります。一例をあげますと、旧約聖書の「ヨブ記」には、「ウツの地にヨブという名の人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。」というヨブが信じられないような艱難に遭遇し、すべての財産、親族を失うにもかかわらず、神さまへの信頼を失わなかったという長大な物語です。

他方、自然科学分野では、ＤＮＡ、免疫などの微細機構、あるいは、超高度電子デバイスにおける荷電粒子の振る舞いなどのミクロから、大宇宙のマクロ現象まで、人知を超えた究極の

自然の仕組みを知れば知るほど、全能の神の存在を心から受け入れるようになるといわれていますし、私もそのように思います。創造主の御技に心からの感謝の念を持つことが改めて大切であると思います。

このようなことについて、皆さんは、形式や機会をかえて、種々耳にし、あるいは形を変えて経験したことと思います。このことを踏まえて、東北学院大学での多くの体験・経験された卒業生各位に対して改めて、卒業にあたっての言葉を贈りたいと思います。私はその言葉に、今から五十年ほど前に出会って感激してメモを作っておきました。しかし、はっきりとした日時は分かりません。私が大学院の学生であった頃、あるいは大学に奉職してすぐの助手時代であると思います。ともあれ、それからずっと私の書斎の壁に張っておき、座右の銘としておりました。このメモ用紙は、いまでは黄色に変色

しております。いつか何かの時に後輩諸君に伝えたいと思っていたものです。それは、二十世紀前半に活躍した米国のラインホルト・ニーバーという神学者の祈りの文章です。一九四三年の夏にマサチューセッツ州の山村の小さな教会で説教したときの祈りといわれています。幾つかの日本語訳がありますが、その代表的なものを紹介いたします。それは、このようなものです：

「神よ、変えることのできないものについては、それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。変えるべきものについては、それを変えるだけの勇気を与えたまえ、そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを識別する知恵を与えたまえ。」

原文の英語は次のような言葉です。

Oh God, Give us
SERENITY to accept what can not be changed,
COURAGE to change what should be changed, and
WISDOM to distinguish the one from the other,
Amen !

ここで、SERENITY は、冷静さあるいは落ちつきというような意味ですし、COURAGE は、勇気あるいは度胸というような意味です。また、WISDOM は、知恵、分別、賢明さなどの意味であることはご存知でしょう。実際、人生において、我々の知恵や努力でできることとできないことが複雑に交錯しております。実際、東日本大震災の大地震や大津波の来襲によって自宅や職場が倒壊・流出した際、あるいは最愛の人の死に遭遇したときに、冷静さを保つことはとても難しくできなかったと思います。まさに、これまで予

想もしなかったことが発生し、我々の能力をはるかに超えたことが目の前に出現しました。このような稀有の事態に直面した経験を踏まえて、このラインホルト・ニーバーの言葉を受け止めたいと思います。これから先の人生で、このような極端に厳しいことに再び直面することは無いかもしれませんが、長い人生において、種々の困難・艱難に遭遇することは十分に予想されます。

また、一方で、とても困難と思われたことでも、多くの友人などと知恵を結集することによって解決できることも少なくないと思います。これらのときに、本当に問題になるのは、現実の対象になっていることが、自分らの努力によって克服できるものなのかどうかを見極める「知恵」であると思います。それを、自分だけの能力で解決しようとするのではなく、「全能の主たる神様」からの知恵、いいかえれば、聖書

に示されている言葉に導かれることによって、多くの問題が解決されることを信じた人生を歩みたいということです。それが、最も確かで豊かな人生を約束してくれることであると信じます。

まさに、皆さんは東北学院大学に在籍中、ここまで述べたようなものの考え方をすることをいつのまにか学んだのではないでしょうか？このことは、他の大学においてはできない大切なことなのであります。このことがまさに「建学の精神」であり、皆さんの心の中には、すでに無意識の内に備わっていることと言っても良いでしょう。

皆さんの今後のご活躍を期待し、晴れの卒業式の告辞といたします。

平成二十五（二〇十三）年三月二十六日

東北学院大学　学長　星宮　望